

# 病院だより ⑨

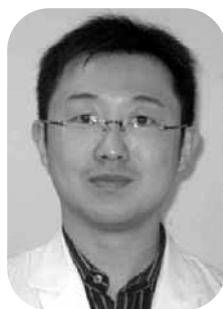
健康手エック

がん検診について

美祢市立病院

内科医長

白井 保之



## はじめに

がんという言葉を聞くと不治の病というイメージを持っている人が多いと思います。がんは早期で見つかるほどそれだけ助かる可能性は高くなります。そして、より早期で発見しがんを克服するために検診があります。今回はまずわが国におけるがんの頻度について解説し、私自身検査と治療に携わっている胃がんと大腸がんの検診の現状について簡単に述べたいと思います。

## 我が国におけるがんの頻度の現況

人口動態統計によるがん死

亡データによると現在、わが国におけるがん全体の死亡者数は年間30万人以上で、死亡原因の第1位を占めております。性別により部位ごとの発生頻度は若干違っており、男性では肺がんが最も多くがん死亡全体の23%を占め、次いで胃(17%)、肝臓(11%)、結腸・直腸(11%)、膵臓(6%)の順となっています。女性では直腸・大腸(14%)、胃(13%)、次いで、肺(13%)、乳房(9%)、肝臓(8%)の順となっています。

一方、がん罹患(新たにがんと診断されること)数は約60万人です。部位別の罹患数は、男性では胃が最も多く全体の21%を占め、ついで結腸・直腸(18%)、肺(15%)、前立腺(9%)、肝臓(8%)の順となっています。女性は結腸・直腸(17%)、乳房(17%)、胃(14%)、子宮(9%)、肺(9%)の順です。

## 早期発見と検診

年間60万人が罹患して30万

人が亡くなられているということは、前向きにいえば約半分の人はがんを克服できるのです。そして早期に発見できるほどその多くが治療でき、しかも軽い治療ですみます。早期がんの多くは症状がほとんどありません。そのため、より早期の段階で発見し治療するためにがん検診を行っているのです。がん検診の対象は健康な人です。このため、がんが見つかる確率は必ずしも高いとはいえません。また、一度異常なしといわれても年齢を重ねるほど発生頻度は上がってきます。一度で安心せず年に一回受けることが大切です。

## 胃がん・大腸がん検診について

胃については検診の普及と診断・治療の進歩により、日本人の胃がん死亡率は大きく減少しました。がんが胃の粘膜層だけにとどまっている状態を「早期がん」といいます。この段階で治療することができれば、一般に治ったといえる5年生存率は90%以上です。検診でよく行われるエックス線造影検査は空腹状態でバリウムを飲み、様々な角度から胃の内部をエックス線で撮影します。がんだけではなく、

潰瘍やポリープなどについても調べる事ができます。ただし、がんかどうか確定するには内視鏡検査(胃カメラ)が必要です。極早期の段階で見つければ内視鏡の治療だけで根治できる可能性もあります。

一方、大腸ですが、大腸がんの検診としてはまず便潜血検査を行い、陽性が認められた場合は、内視鏡検査(大腸カメラ)か、肛門からバリウムを入れて腸の内部を見る注腸エックス線検査を行います。大腸がんは早期発見のメリットがより明確です。がんになる前の前がん病変(ポリープ)のうち内視鏡で切除すればがんが予防できますし、極早期のがん(粘膜内)であれば内視鏡で切除すれば完全に治ります。手術が必要な状態であつてもより早い段階で見つかるほど治る可能性は高くなります。

検診を行うことにより胃がんも大腸がんも死亡率が低下すること証明されていますが、エックス線造影検査、便鮮血で異常なしと診断されたからといって100%がんがないというわけではありません。そこで検診を勧める側にとって非常に心苦しい点です。胃も大腸も最も精度が高い検査は内視鏡検査(胃カメラと大腸カメラ)です。しかし内視鏡検査は人によって程度が異なりますが苦痛を伴い、まれではありますが出血や穿孔(せきこう)消化管に穴があくこと)といった偶発症がありますので検診レベルで全員に内視鏡検査をすすめていないのが現状です。潰瘍やポリープ、がんといった胃の病気を患ったことがある方、毎年検診で引っかかるけど内視鏡検査を受けても異常なしといわれる方、大腸ポリープがあり定期的に受けるように言われた人は検診でなく初めから内視鏡検査を受けることをおすすめします。

がん検診を受ける場合、多かれ少なかれ心理的な負担があります。「がんといわれるのが怖いから」、「自分はがんにならない家系だから」、「がんになったらそれまでよ」といった理由で検診を受けられない方も多くいます。美祢市は人口当たりの検診を受ける方の人数が十分とはいえないのが現状です。がん検診のかけがえのない利点は、早期発見により救命ができることです。是非、検診について前向きに検討していただけたらと思います。

問合せ先 美祢市立病院  
( ☎ 0837 1700 )

# まちがど ホットライン

## 第11回秋吉台野火の祭典



2月28日、国内最大のカルスト台地、秋吉台で「野火の祭典（夜の山焼き）」が行われ、約3500人の観光客などが炎の祭典を楽しみました。

午後7時に、秋吉台展望台から若竹山、妙見原に向かう沿道のトーチに火が灯され、剣山に火で大きな「火」の文字が現れると、ボランティアなどが2月15日の山焼きの際に残っていた枯れ草に火を付けました。炎は音をたてながら1時間にわたって約25ヘクタールを燃やしました。

フィナーレでは、約110発の花火が打ち上げられ、祭典を盛り上げました。

## 合併記念第1回美祢市社会福祉大会



3月8日、美祢市民会館で合併記念第1回美祢市社会福祉大会が行われました。

式では、美祢市社会福祉協議会の伊藤喜文会長が「住み慣れた地域で安心して暮らすことができるよう、より身近な福祉活動の展開に努める」とあいさつした後、多年社会福祉事業の振興発展に寄与し、功績が顕著な人などの表彰や感謝状の贈呈が行われました。

記念講演では、風の丘 阿蘇 大野勝彦美術館の大野勝彦館長が「ありがとうがいつか笑顔になった」と題して講演を行いました。

## 大嶺高校、美祢工業高校 最後の卒業式



3月1日、美祢市民会館で県の高校再編計画で青嶺高校に統合された大嶺高校と美祢工業高校の最後の卒業式が合同で行われました。

式には大嶺高校の卒業生34人と美祢工業高校の卒業生60人や在校生、保護者などが出席しました。

両校長の式辞や青嶺高校生徒による送辞の後、大嶺高校の伊藤奨悟君、美祢工業高校の中尾翔太君が「訓練を乗り越えて立派な社会人になる」「強くたくましく生きること恩返ししていきたい」と答辞を述べました。

継承式では、両校の校旗が卒業生代表から青嶺高校の在校生に手渡され、両校の歴史と伝統とともに青嶺高校に引き継がれました。

## 地域の農産物を利用した特産品を



昨年9月、秋吉台の自然や農産物などを活用し、食と健康をテーマにした事業に取り組み、秋吉台の新たな魅力の創造を図ることを目的に「おいしい秋吉台をつくる会推進協議会」が発足しました。同会の発足は、山口県による民間協働型中山間地域重点プロジェクト推進事業の「秋吉台ワイナリー開発事業」のチャレンジ意欲をもった取り組みの一環であり、若手農業従事者を中心に活動を展開しています。

3月16日、同会の堀田会長と会員の上原さんが美東の「こほう」を原材料とした「秋吉台」ぼっこのかりんと「製品化を村田市長に報告されました。今後も地域の農産物を利用した、特産物の開発に取り組みられます。」